

国立ハンセン病資料館の改善を求める提言

国立ハンセン病資料館館長
成田稔殿

2008年5月19日
ハンセン病市民学会

ハンセン病市民学会の第4回総会・交流集会が、2008年5月10・11日の両日、東京の日本教育会館と多磨全生園で開かれ、回復者やハンセン病問題に関心をもつ多くの市民など延べ1400名の参加の下に、様々なハンセン病問題の現状について意見を交換した。11日に多磨全生園で行われた「リニューアル資料館を考える」分科会では、2007年4月に再開館した国立ハンセン病資料館について、参加者たちによる活発な意見交換や提案が行われた。

- 1) まず、展示内容について、以下のような意見や提案が行われた。
 - ◇「ハンセン病に対する古来の差別意識が強調される一方、近代以後の日本の国家的隔離政策の問題性への指摘が薄く、全体としてバランスを欠いている」
 - ◇「歴史の展示で、古くからの差別やらい菌の発見に続けて隔離政策が叙述されているため、隔離を正当化しているかのようにも見られる。改善すべきだ」
 - ◇「山井道太氏の死のような具体的な実態事例や、国際的な医学動向との乖離の経過などが、もっとわかるような展示にしてほしい」
 - ◇「三園長証言などの具体的事実や各界の責任を明らかにすることが、同じような過ちを繰り返さないために必要なことではないか」
 - ◇「ハンセン病の医学的説明はハンセン病医学の近年の急速な進歩をもっと反映させるとともに、館をすべての感染症の患者と健康な人の共生を学習する場にしてほしい」
- 2) さらに、館の運営についても、「市民の希望を広く聞き、資料をみんなで共有できる『開かれた資料館』であってほしい」などの意見が出された。

こうした真摯な議論の結果、参加者の総意として次のような提言内容がまとめられた。また、ハンセン病市民学会もこの提言を重く受けとめ、ハンセン病市民学会の名の下に館長に提言することとした。

提 言

私たちは、日本のハンセン病問題の歴史や事実を正面から見つめ、教訓を今後にかさなければならぬと思う。そのために資料館の影響は大きく、未来へ向けての責務は重い。展示をよりよいものにするには喫緊の課題である。

館長はじめ資料館関係者が、近年の熊本地裁判決や検証会議報告を十分ふまえて、上記したような多くの市民らの意見や感想を真剣に受け止めて、是非「市民一人ひとりのものである」ような資料館にしていられるよう、提言する。